



歴史

社会の諸問題に主体的に向き合う力の育成をめざした授業 ～20世紀「戦争の世紀」の学習を通して～

鷗友学園女子中学高等学校 村田祐子

1 はじめに

本校では、以前より、主体的に社会の諸問題を考える力を身につけるという視点を重視して授業を展開している。現代社会は、民族対立・紛争など深刻な問題に直面している。このような社会に出て行く生徒たちが、一つ一つの問題に多角的に取り組める力をつける必要があると考えるからだ。

歴史の授業は、これからの社会で主体的に生きていく力をつけるために必要な歴史観をもたせることを最終目的としている。とくに「戦争の世紀」といわれる20世紀の歴史を主体的にとらえることで、現代社会の諸問題に向き合っていく視点をもてるようにしたい。

2 授業の下地づくり

近年の生徒はプレゼンテーションの技術は上がってきている一方で、自分の意見を明確に示し、他者の意見も受け入れ、議論し合う力は十分ではないように思う。そこで、「自分の意見を否定されるのではないか」、「私は間違っただけを言っているのではないか」という不安を中学1年生のときから段階的に取り除き、議論し合う能力をつけていけるようなカリキュラムを、教科全体で構築している。調べ学習やグループワークはもちろんだが、ふだんの講義のなかでもつねに生徒たちに問いかけ、双方向の授業を行うよう心がけている。

そして、2年生の1年間で、表1のようにテー

表1 1年間のテーマ学習の計画

時期	学習テーマ	内容
5月	「古代国家を建設しよう」	各自がヤマト王権の官僚となり、国家を建設するために何を整えていくか、グループごとに考える。 <留意事項>その制度の必要性を根拠づけさせる。
6月	「天下分けめの関ヶ原」	各自が、関ヶ原の戦い当時の戦国大名となり、東軍につくか、西軍につくかを考える。 <留意事項>家康と三成の手紙をもとに、味方になる理由を考えさせる。
7月	「ナポレオン」	グループごとにリレー形式で、ナポレオンの業績をプレゼンテーションする。ナポレオンは、ヨーロッパ社会にどのような影響を与えたのかを考える。 <留意事項>ナポレオンの業績を通じて、革命思想の拡大とその影響についてとらえさせる。
11月	「模擬パリ講和会議」	※本稿で紹介
1月	「太平洋戦争開戦200日前」	開戦200日前からの大本営政府連絡会議を各自が首相、外務大臣、陸軍、海軍などになって再現する。 <留意事項>なぜ、日本が日米開戦にふみ切ったのか、考えさせる。

マ学習を実施する。このなかで教員は、生徒たちがただ調べた内容を発表して終わるのではなく、「なぜ、そうなったのか」や「なぜ、そのように考えたのか」をふまえて発表するように意識づけていく。

テーマ学習以外にも、『社会科 中学生の歴史』の「タイムトラベル」を利用して、自由かつ積極的に発言する雰囲気をつくる工夫をしている。單元ごとに「タイムトラベル」から読み取れることを自由に発言させ、時代のイメージをつかませたり、単元の復習に用いたりしている。ここで、生徒たちがたがいの発言に対し、「気がつかなかった」、「おもしろい」などと前向きに受けとめる姿勢を自然につくり出すことができ、その積み重ねの結果、年度の後半に、戦争に関するテーマ学習で積極的に発言できるようになると考えている。

3 模擬パリ講和会議

(1) 模擬パリ講和会議とは

クラスをアメリカ合衆国、イギリス、フランス、日本、インド、中国の代表団に分け、第一次世界大戦の講和会議を模擬的に行う。毎年、生徒たちのなかで印象に残る授業である。議長は教員が務め、本来は公式会議と非公式会議があるが、非公式会議を中心に行う。

(2) 事前準備

会議を行う1週間前までに、会議の展開に関する説明を行い、各国の代表団（4～5人ずつ）を決める。本校は1クラス40人前後で9～10グループできるため、アメリカ合衆国、イギリスなどの列強国に2グループを割りあてる。

このとき注意することは、事前に該当単元の

表2 事前準備および本時の学習

時間	学習内容・生徒の活動	指導上の留意点	資料など
事前準備	<ul style="list-style-type: none"> ・会議の流れに関する説明。 ・クラスを代表団に分ける（アメリカ合衆国、イギリス、フランス、日本、インド、中国）。 	<ul style="list-style-type: none"> ・1グループ4～5人になるように分ける。 	プリント：会議の流れ
10分	<ul style="list-style-type: none"> ・開会前の打ち合わせ：自国の方針を確認・決定し、会議における作戦を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「各国シート」の情報のみで会議を展開する。生徒が積極性、協調性、臨機応変さを発揮するようはたらきかける。 ・書記を1名決め、話し合いの内容を記録させる。 	プリント：「各国シート」・ワークシート
5分	<p>開会</p> <p>議題1：敗戦国ドイツに賠償金を課すか 議題2：国際連盟を設立するかどうか 議題3：国際連盟設立の場合、常任理事国にはどの国がふさわしいか</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・議長（教員）が開会を宣言。 ・議題の確認を行う。 ・議題について、各国の意見を表明させる。1代表団30秒。 	
10分	<p>非公式会議</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他国の表明をふまえ、自国の方針を確認。必要な場合は修正してよい。 ・賛同者を増やすために、座席をはなれて交渉を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・時間を10分で切る。 ・代表団の動きを見て回るが、具体的なコメントはしない。 ・動きが少ない場合は、うながしても良い。 	
10分	<p>公式会議</p> <ul style="list-style-type: none"> ・とくに発言を行いたい代表団は発言する。 ・議決をとる。議題1、議題2は各代表団1票。議題3は、用紙に4か国を記入して投票。 	<ul style="list-style-type: none"> ・発言は、1代表団1分以内。 ・議題3については、会議に参加していない国に投票してもよい。 ・議決後、その他の発言を受けつけてもよい。 	投票用紙
3分	<p>閉会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒は感想シートを記入し、後日提出。 	<ul style="list-style-type: none"> ・議長が閉会宣言を行う。ここで、学習活動などについて批評する。 	感想シート

授業は行わないことである。教員は、史実と異なる結果になったとしても、生徒が自分たちで考え、結論づけることを重視する。

(3) 本時の学習

初めに、それぞれの国の政治状況、第一次世界大戦における立場などの情報が入っている「各国シート」を配布した。シートには、「公にはできない本音」なども情報に入れておいた。それをもとに、各代表団で下記の3つの議題に対する自分たちの方針を考えさせた。

議題1：敗戦国ドイツに賠償金を課すか

議題2：国際連盟を設立するかどうか

議題3：国際連盟設立の場合、常任理事国にはどの国がふさわしいか

イギリス代表団の1つは、イギリスの「各国シート」(図1)や19世紀の国際関係のイメージから次のように話していた。

「イギリスが第一次世界大戦後も影響力をもちたいのに、フランスが邪魔してくるんじゃない?」

「どうしたらフランスやアメリカと戦える?」

「インドと中国を味方につけようよ」

このように意見交換をしながら、だれがどの国に交渉に行くか、どのように交渉するかまで話し合いを進めた。なお、「各国シート」には、他国の情報はわずかししか掲載していない。これは、非公式会議の時間に交渉しながら、情報を引き出させるためである。

議長が開会を宣言、議題を確認し、1代表団30秒で各国の意見を表明したのち、10分の非公式会議の時間をとった。その間に、生徒は各国の意見をふまえ、全会一致をめざして交渉した。

上記のイギリス代表団の生徒がインド代表団と交渉しに行くと、フランスや中国の代表団の生徒もやってきて、次のように話していた。

英「独立したいんでしょ? 独立させるから、協力してよ。」

仏「イギリスって、今までインドに対してひどいこ

としてきたじゃない? うちと組むといいよ。インドのこと尊重するよ。」

中「立場が似てるから、気持ちわかる。イギリスやフランスは信用ならないじゃない? いっしょに抵抗しようよ。常任理事国におたがい入ろう。」

例年、インド代表団への交渉は白熱する。今回のクラスでは、インドとイギリスを切り離す動きが活発で、実際、インドがイギリスに抵抗するに至った。

非公式会議のあとは公式会議に移った。発言したい代表団は発言し、議題1～3について議決をとっていく。このクラスでは、議題1の結果は「賠償金を課す」、議題2の結果は「国際連盟を設立する」となった。

議題3についてはフランス代表団が、常任理事国として「フランス、アメリカ合衆国、イギリス、タイ」を推した。タイを入れた理由を質問され、以下のように答えていた。

「第一次世界大戦で国土が戦場になり、国としてきびしい状態になった。もう、戦争はしたくない。アメリカは『14か条の平和原則』を掲げているから入ってほしい。また、東南アジアで植民地になった経験のないタイが入ることで、いろいろとバランスがとれるのではないかと思った。」

フランスの「各国シート」(図2)のほか、手元にある帝国主義の授業で使用した作業用の白地図を見て判断したとのことだった。投票の結果、タイは常任理事国には選ばれなかったが、推薦の意図がしっかりとしており、ほかの生徒からの評価が高い意見であった。

生徒は、手にした情報を十分に活用し、自国のメリットを考えながら動いていた。事前知識が不十分ではあるが、イギリスがインドや中国を必死で味方につけようとしたり、アメリカ合衆国がリーダーシップをとろうとしたりしていた。常任理事国の投票結果は、史実と同じになることもあれば、まったく異なることもある。今回は後者であり、多くの生徒が「自分の国だ


担当国：イギリス 	
①戦争の結果	連合国側・戦勝国：連合国の中心的な国として戦争を展開
②戦争による自国内の影響	<ul style="list-style-type: none"> ・約95万人の戦死者 ・2680億マルクの戦費（参戦国で最大の戦費・アメリカから多額の借金） ・戦争の長期化で、兵力不足となり植民地の人々を兵士に動員
③議題に対する考え方	<p>議題1 ドイツに対して賠償金を請求するか？</p> <p>【首相 ロイド・ジョージの当初の考え方】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本心は、「新しい戦闘を挑発することのない講和（再び戦争にならない）」を目指したい。また、経済的なパートナーたるドイツを過度に痛めつけることは賢明ではない。なので、支払い可能な額の賠償請求にとどめたい。 ・しかし、世論や自国の議会では、ドイツに対して報復的な厳しい講和を求める声が多い。（会議の前の英国総選挙で、国民の復讐世論を敏感に感じとり、「ドイツ皇帝の処罰」を訴え、さらにドイツから「最後の一滴まで」賠償金を絞り取ることも公約にして、勝利した） <p>【最終的な方針を記入しよう】</p>
議題2 国際連盟を設置するか？	<p>【首相 ロイド・ジョージの当初の考え方】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・正直、国際連盟という組織が世界平和にどれだけ有効性があるか、やや疑問ではあるが、大英帝国を維持していくためにイギリス中心の秩序を築きたい。安全保障にはアメリカとの協力は不可欠とも考えている。 ・英国国民は、再度の大戦を避ける国際連盟のような機関を求めている。 <p>【最終的な方針を記入しよう】</p>
議題3 国際連盟を設置する場合、常任理事国（4カ国）はどこの国がよいか	<p>※自分たちで考えてみよう！（イギリスは入るべき？他国はどこがよいのか？）</p> <p>【最終的な方針を記入しよう】</p>

図1 「各国シート」イギリス


担当国：フランス 	
①戦争の結果	連合国側・戦勝国：ドイツと激戦を戦う
②戦争による自国内の影響	<ul style="list-style-type: none"> ・600キロに及び暴撃を浴びたの激戦を戦った。 ・ヴェルダン要塞の戦い＝WW1最大の激戦・36万人の死傷者を出して何とか防衛した。 ・約139万人の戦死者 ・1340億マルクの戦費を使う（アメリカから多額の借金）
③議題に対する考え方	<p>議題1 ドイツに対して賠償金を請求するか？</p> <p>【首相 クレマンソーの当初の考え方】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ドイツと直接国境を接しており、ドイツへの警戒心が強い。 →そのため、ドイツの（経済的）弱体化は欠かせず、賠償金に関しては、懲罰的な額を求めたい。（イギリス・アメリカより強く請求することを主張したい。） ・アメリカから軍需物資を購入し、戦費も借りているので、その処理に頭を悩ませている。 <p>【最終的な方針を記入しよう】</p>
議題2 国際連盟を設置するか？	<p>【首相 クレマンソーの当初の考え方】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国際連盟そのものに関しては、フランスの安全保障に効果的かどうか疑問をもっている。しかし、自国の安全保障を実現するにはアメリカやイギリスの協力が必要とも考えている。 <p>【最終的な方針を記入しよう】</p>
議題3 国際連盟を設置する場合、常任理事国（4カ国）はどこの国がよいか	<p>※自分たちで考えてみよう！（フランスは入るべき？他国はどこがよいのか？）</p> <p>【最終的な方針を記入しよう】</p>

図2 「各国シート」フランス

けでなく、ほかの国の状態や関係まで考えてすごいと思った。自国の利益を考え、それを受け入れてもらうのが難しかった（アメリカ合衆国）」といった感想を述べた。

4 おわりに

次時の授業で、実際のパリ講和会議について講義を行った。生徒たちは、実際のできごとと、自分たちの行動を比較しながら授業に参加するため、理解が深まったようである。実際、授業中にも「なぜ、そのような判断をするのか」、「どうして、そのような結果になるのか」という質問が活発に出ていた。

この模擬パリ講和会議のように、生徒が歴史をできるだけリアルに感じられるような工夫をしている。とくに、戦争の歴史を扱う場合、歴史的事項の流れや結果だけに着目してしまうと、

背景にある複雑な外交関係が見えなくなってしまう。また、勝者と敗者、加害者と被害者など、単なる二項対立で考えると、かたよった見方になってしまう。第一次世界大戦後にこのプログラムを組みこむことで、複雑な外交関係を目を向けるようになるのである。このような視点は、「世界のなかの日本」を意識するようになるので、公民の授業にもつながっていくと考える。

公民でも、ニュースなど実際に起こっているできごとを通して、社会のしくみについて学んでいくことを軸にシラバスを編成している。対等な立場で、たがいの意見を尊重し、議論する力の土台は歴史の授業を通してつちかっていると考えている。

帝国書院の指導者専用サイトに、本授業研究の「各国シート」を掲載しています。
(<https://www.teikokushoin.co.jp/members/>)